

革は既に教育現場、地方行政等から、実践的に展開されている。

山梨県立塩山高等学校の廣瀬志保教諭は、「総合」の授業「生命」において、看護・医療系への進路を希望する生徒たちに向け、臓器移植など生命倫理に関するテーマや、命のビザに象徴される杉原千畝の生き方を題材にし、生徒自身が考える授業を展開している。この「総合」での廣瀬教諭の試みにより、知識注入型に慣れ切った生徒たちの学びの姿勢が変わった。そして生徒たちの意欲的に学ぶ姿に、今度は廣瀬教諭が触発され、自らの専門科目である生物の授業も主体的な学びの授業へと変化させていった。さらに廣瀬教諭は、他の「総合」の授業において、他教科教員たちをも巻き込んで、協働探究を重ねながら授業を創り出すという組織的広がりも実現させていった。

授業者の一步から生徒が、授業が、教員が、そして学校が、双方向に響き合いながら変わっていったのである。

静岡県富士市教育委員会の指導主事である眺野大輔氏は、実際の席を富士市立高等学校の職員室に置いている。その場で教員たちとの協働により「総合」の授業づくりを中心とした学校づくりのデザインと支援を日々行っている。また、岡山県では、全

県を挙げて「総合」への取り組みを積極的に行っており、授業は基より、既に全ての高校が「総合」の全体計画を作成している。その過程で教員たちは、育てたい生徒や目指したい学校像を意識化することができる。地方教育行政が、「総合」を基軸に学校を支えることによって、学校づくり、学校改革を促進しているのである。

●大学入試改革のゆくえ

さて、本年6月4日、平野博文文部科学大臣より「社会の期待に応える教育改革の推進」が、翌5日には文部科学省より「大学改革実行プラン」が公開され、大学入試改革の全貌や方向性がかなり明らかになった。プランには、高大の教育内容を一貫させプロセスによる質保証をすること、そして教科の知育偏重の入試から脱却し各大学の丁寧な選抜へ転換することが明記されている。これらのことと、現在、中央教育審議会、初等中等教育分科会、高等学校教育部会で審議されている内容を重ね合わせてみると、例えば、京都市立堀川高等学校における「総合」、「探究基礎」での生徒の個人研究の様子、それを高校教員とともに継続的に支える大学教員や大学院生たちの連携の様子が思い出されてきた。その連携



まつた・としこ ●2007年より福井大学准教授。教職大学院の創設に関わる。2012年より現職。前任校の金沢大学附属高校で「家庭科」非常勤講師も併任。大学教育学会・日本家庭科教育学会等に所属。研究テーマは、高校「総合的な学習の時間」と大学教養教育の連続性・ESDとポスト消費社会の構築等。

の延長線上に選抜が位置付けられるとしたら、それはまさに「意欲・能力・適性等の多面的・総合的な評価」であり「各大学の丁寧な選抜」と言えるだろう。

●おわりに

本稿では、高大接続の場面における教育改革について、「総合」に焦点を当ててその可能性を考えてみた。もちろん、「総合」は一つの可能性であり、他にも多くのアプローチはあるだろう。しかし、「総合」を基軸とした大学教育との連続性や学びの質の転換、学校改革や大学入試改革の可能性は、かなり高いように思われた。

拙論に対して読者の皆さまのご意見を頂けると幸いである。



「総合的な学習の時間」と高大接続

〈第5回〉

松田 淑子 福井大学教育地域科学部教授

●「総合的な学習の時間」の意義

「総合的な学習の時間」(以下、「総合」)は、平成10・11年の学習指導要領の改訂において、小・中・高等学校で創設された。当時高校教員だった私にとって「総合」は、目の前の生徒と、授業者である自分自身と、社会とを見つめて自由に創造できる魅力的な授業であった。漠然とだが、「総合」は21世紀を展望した教育の象徴であり、その転換を図る起爆剤でもあるという実感を持っていた。しかし、一般的には、「総合」に対して現場、とりわけ高校教員からの評判は悪かった。専門教科の時間を削ってまで行う意味が見いだせないようであった。

高校現場を離れた今も、私はやはり今日の教育改革の流れの中で、「総合」の果たす役割とその可能性は大きいと思っている。本連載第1回(4月9日付1203号)で青野透氏は「総合」が目指す主体的な学びは、大学だけでなく全ての段階において重要だと主張している。私も同感であり、近年はむしろ、自分の思い以上に重要視されなければならないのではないかとすら思っている。なぜなら、各所で言われていることだが、現代社会は「お金をもうけること」や「消費すること」を最大の価値としてき

た消費資本主義の時代から、人が模索し働しながら新しい知を生み出すことに価値が置かれる「知識基盤社会」へと移行してきているからである。それは同時に「予測困難な時代」でもあり、いずれにしてもこのような時代を生きていく子どもたちや若者たちにとって、「総合」が目標と掲げるような、自ら学び、考え、主体的・探究的に問題解決に取り組む資質や能力を身に付け、創造的・協同的に取り組むこと、自己の在り方生き方を考えることは必要な力だからである。

大学教育における主体的な学びの実現と、小・中・高の「総合」の充実、それらによって小・中・高・大の主体的な学びが連続されるのである。だからこそ、教員がそのような学びを展開し保障することは使命と言えるのだろう。ただし、そのような授業は思いの他難しい。前回(6月11日付1210号)記したように、ようやくそのような授業を展開できる教員の養成も始まるうとしている。

●「総合的な学習の時間」の実践事例から

「総合」はそのものが教育改革の原動力となり得る。「総合」を基軸とした教育改